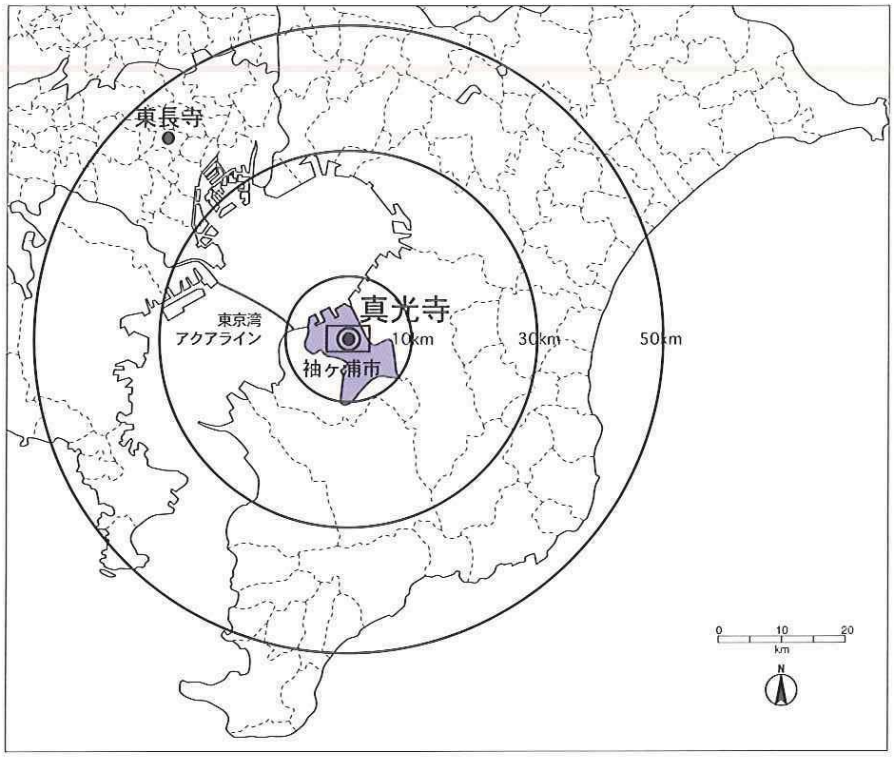


真光寺寺報　「瓦谷山たより」

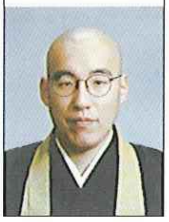
本誌は袖ヶ浦市、曹洞宗瓦谷山真光寺の寺報第１号です。真光寺は千葉県の東京湾の中央、東京湾を横断する東京湾アクアラインからほど近い、袖ヶ浦市の最深部に位置する小さな山寺です。開創は弘治2年（1556年）9月8日です。本年まで448年の歴史を刻んできました。開山はかつて上総の高野山といわれた、真里谷、真如寺8世、鷹山厳召大和尚です。瓦谷山という山号は当地に平安時代のカワラケが出土し、真光寺近接の谷でそれを焼いていたところから、付けられたといいます。

瓦谷山たより

vol.1

発行日　2005年1月吉日
発行人　真光寺
住職　岡本和幸
印刷　現代社
編集　(株)地球工作所

ご挨拶



早くも空の色が少しずつ春めいてまいりました。真光寺住職を拝命して以来思い続けてきた、お寺の新聞をお届け致します。真光寺では現在開創四百五十年記念事業と銘を打って、墓地の開発と伽藍の整備を進めています。今後はこの新聞を通じて、進捗状況や、真光寺の色々な活動、仏教の教えや情報を発信していきたいと思います。

本年は整備事業が正念場を迎えます。まもなく所轄庁への事前協議書の提出を予定しており、遺跡調査および植栽は今春、秋には土工事の着工を予定しています。何かとご迷惑をおかけすることと思いますが、ご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

これらの事業を行うにあたって、真光寺が目指す三つの目標があります。一つは手狭な上に、耐用の限界が来ている現在の伽藍を、檀信徒の皆様になるべく負担をかけずに建てかえ、さらには維持をしていくこと。少子高齢化の進む社会情勢を考えれば、よほどの備えがないと今後の寺院の護持は難しいと思います。二つには先祖の残してくれた公共財である寺院を、多くの人が活用でき、社会に貢献できる寺院にすることです。このために禅センター化、里山再生を中心とした、環境教育事業と、地域貢献を考えています。三つめは寺院、仏教の現代化と、力強い宗教活動を目指すということです。修行道場としての寺院、駆け込み寺あるいはアシュラム（保養所）としての寺院を目指すとともに、檀信徒の皆さまと共に歩む寺院にしていくことを目標にしています。現代の人々とお寺、僧侶の間の大きな溝を少しでも解消し、人類の叡智たる仏教の確固たる裏づけの元に、樹木葬、合同葬などの新しい終末システムの提供などを、考えていきたいと願っています。

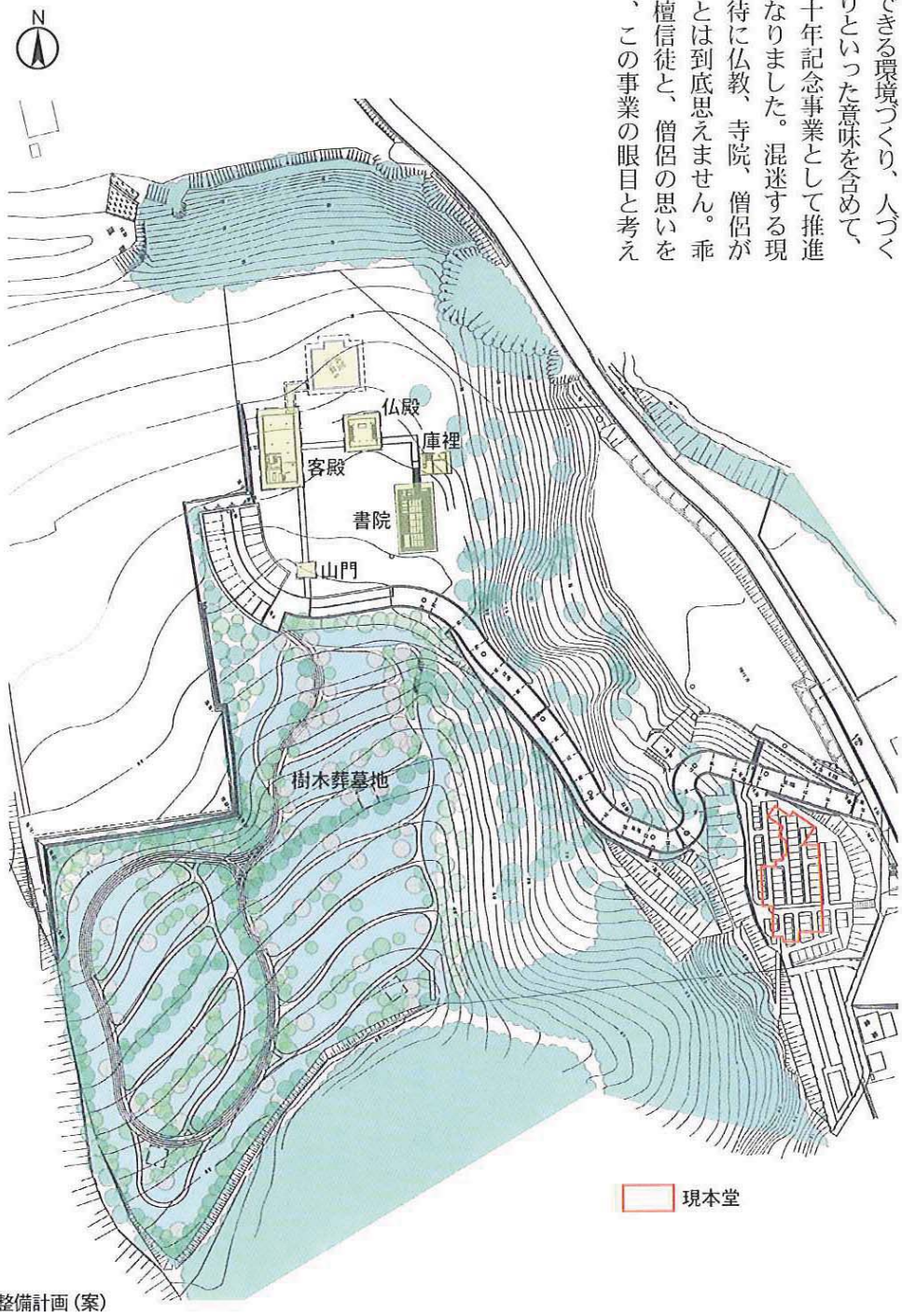
思いをつづることは簡単なことですが、実行することは大変です。少しでも前進し、次世代に良いものを良い形で託すために努力していきたいと思います。皆様のご協力を心よりお願い致します。　合　掌

開創四百五十年記念事業

現在の真光寺住職は、平成六年に入山、平成七年秋に二十三代住職として就任致しました。入山以来、寺域の整備と伽藍の修繕につとめ、特に平成八年冬、檀信徒の皆様の協力を仰ぎ、檀信徒総出での本堂改修工事、庭の整備工事などを経て、徐々に信仰の場に相応しい寺院としての姿を整えてまいりました。しかしながら建設以来百七十年を経た本堂、庫裏は、その構造から耐用年数を超えており、抜本的な改修が必要になっています。

またこの間四期の法要の整備、落語会の定期的な開催などの活動の他、東京方面からの合宿の受け入れ、泊りがけでの坐禅会の開催、お寺の開放などの活動を行ってまいりました。さらに信仰の聖地たる寺院の背景である寺の周りの森を、鎮守の森として整備しようと発願し、檀信徒の皆様の協力を得て、美しい照葉樹林を出現せしめました。こうした積極的な宗教活動をより円滑に行うと共に、時代の移り変わりと、生活習慣の変化に対応した活力あふれる寺院活動のための、近代的な伽藍の整備を願っていました。

この思いを住職の法幢師でもあり、真光寺の責任役員でもある四谷東長寺様にご理解いただき、現代の人々のニーズに応えつつ、本来の仏教の思想に基づいた伽藍の整備と、墓地の整備を一体とする共同開発事業としての提案を受け、これに開かれた寺院の実現、積極的な仏教の布教、現代に即応できる環境づくり、人づくり、森づくりといった意味を含めて、開創四百五十年記念事業として推進することとなりました。混迷する現代社会の期待に仏教、寺院、僧侶が応えているとは到底思えません。乖離していく檀信徒と、僧侶の思いを紡ぐことが、この事業の眼目と考えています。

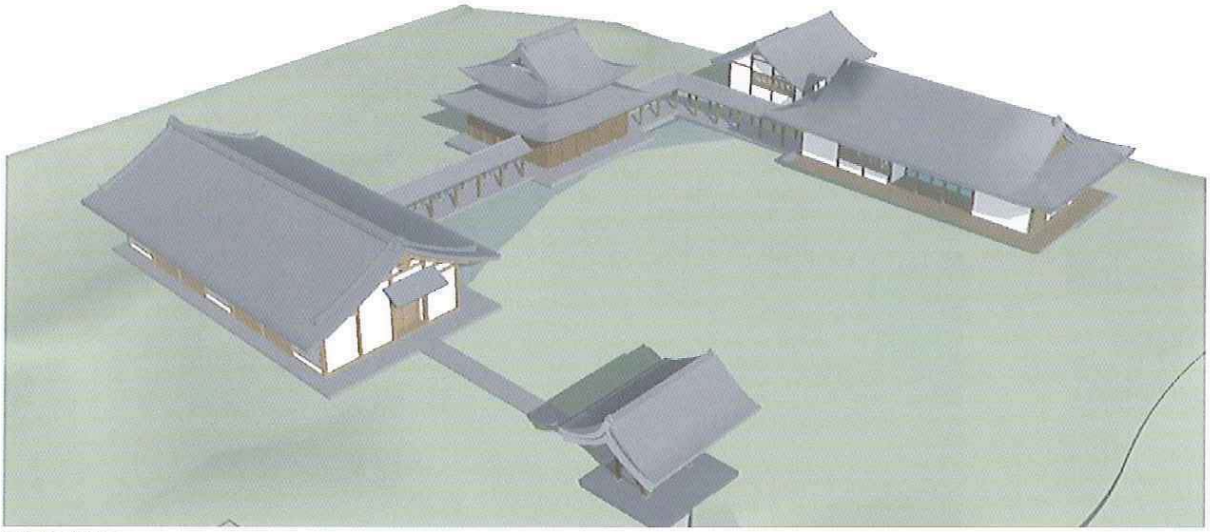


全体整備計画（案）

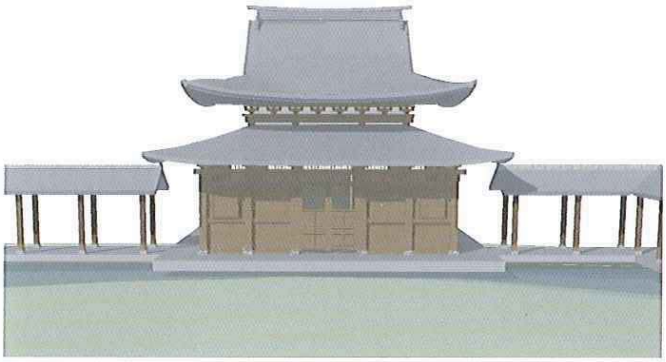
新伽藍の整備

真光寺では開創四百五十年記念事業として、新しい伽藍を建設致します。現在の本堂の建つ敷地では手狭なため、現在の本堂裏手の山の上に移転します。建設する伽藍は、山門、仏殿、客殿、書院、庫裡の五棟を予定しています。最近は座敷よりも椅子席を希望する方が多くなってまいりました。生活習慣が劇的に変化してきているのでしょう。また住宅事情によって葬儀、法事などの仏事を自宅で行うことができなくなってきています。新伽藍はそうした時代性に配慮した設計になっています。

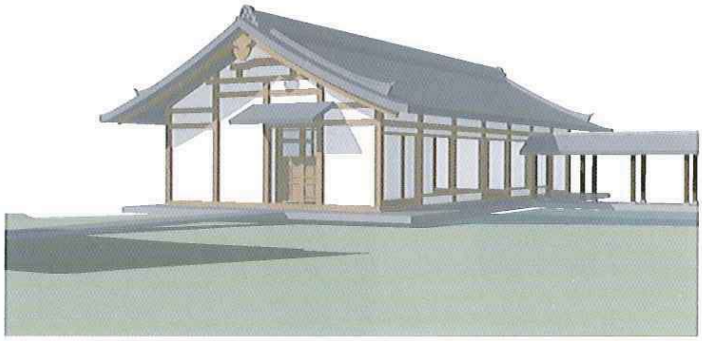
仏殿は寺院の中心的建物であり、法事を行う場所、簡便な葬儀を行う場所として想定し、位牌堂を兼ねていて、永代供養に対応できるようになっています。客殿は椅子席を想定し、葬儀会場として、あるいは葬儀、法事の後席に使用できます。近代的な受付、寺務所もここに入ります。書院は畳み敷きで、葬儀会場、お通夜、法事、葬儀の控え室、法事、葬儀の後席などにも使用できます。伽藍全体が車椅子に対応できるフラットな設計となっています。



新伽藍俯瞰図



仏殿



客殿（寺務所）

書院（仮本堂）・庫裡（住職宅）

樹木葬墓地計画

樹木葬墓地とは、墓石の代わりに木を植える墓地のことです。近年話題になることも多くなってきました。計画している真光寺樹木葬墓地は、墓地埋葬法に基づいた、正式な許可を受けた墓地です。区画もありますし、ご遺骨を納めるカロートもあります。ただ墓石の代わりに墓樹を植えるだけです。さらに区画の周りには大木になる樹木が植えられ、全体としては鬱蒼とした森のような形になります。森の中の散策路の脇に咲く花木の下に埋葬されるというイメージの墓地になるかと思います。もちろん始めから森であるわけではありません。小さな木々が年月と共に森になっていきます。まもなく所轄庁への申請を行う予定です。本年秋には着工したいと考えております。

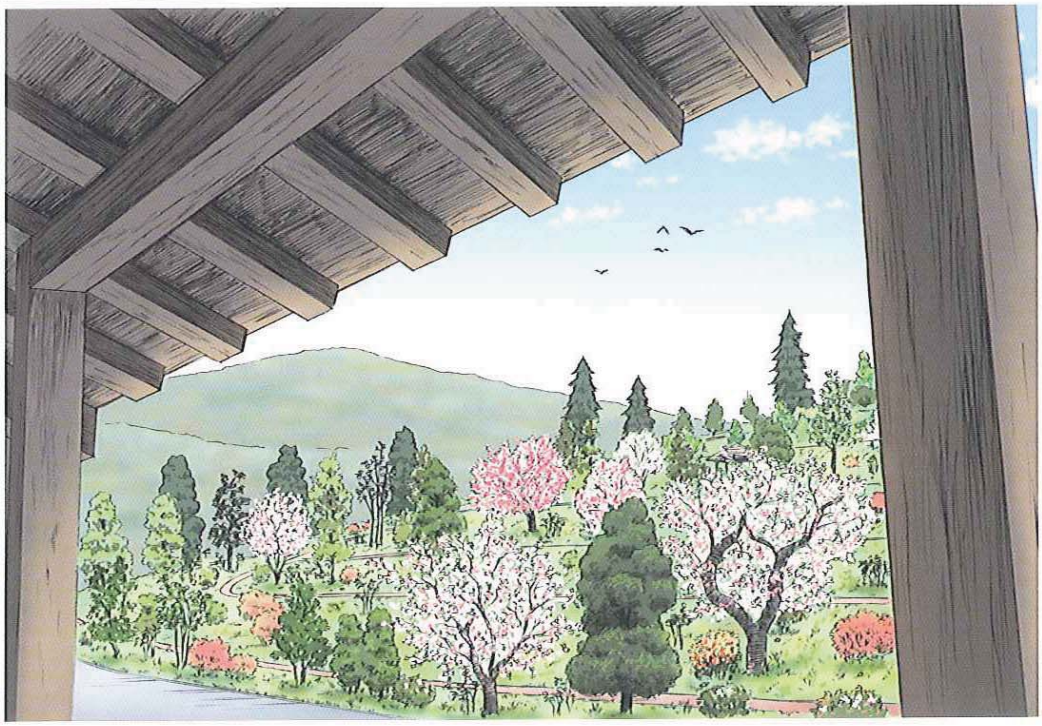
墓樹の一例

ミツバツツジ
（4月、桃）

クチナシ
（6月、白）

ムラサキシキブ
（10月、紫の実）

マンリョウ
（11～12月、赤い実）



樹木葬墓地のイメージ図

真光寺の活動紹介

真光寺では以下のような活動を行っています。現在は整わない施設の中での活動ですが、毎年大勢の参詣を受け、徐々に活動の範囲を広げています。これまでの活動に加え、本年夏には小学生を対象とした子供坐禅合宿を企画しています。今後はこの寺報を使いご案内していきたいと思いますので、奮ってご参加下さい。またお寺の本堂を使いたい方、合宿を行いたい方、坐禅修行、子供坐禅会等を行いたい方、遠慮無くご相談下さい。

坐禅の道場

住職が真光寺に入山した平成6年以来、毎年東京のお寺の坐禅会の方々を中心に、一泊坐禅会を開催しています。主に春と秋に開催致します。中国の一般的な仏教信者が着る法衣を用意してあり、これを着けて坐禅をします。夜には一杯やりながら楽しく情報交換をしています。

寺のある暮らし（お寺の開放）

定年を迎えた、伴侶を亡くした、そんな時にお寺に来てゆっくりと過ごしていただきたいと考え、春、夏、秋の三回開放の日を設定し、その中で自由に滞在していただくようにしています。

朝のお勤めと、食事、就寝以外は自由です。イベントも用意してあり、散歩をしたり、庭いじりをしたり、畑を耕したりの自由な時を過ごす方、炭を焼いたり、竹細工をしたり、里山再生活動をしたりする各種イベントに参加する方様々です。

自分で作った竹の器で夕食

住職の法話を聞く

一泊座禅会のようす

写経のようす

秋の野山を散策

早春には竹の子掘りを

里山再生活動

里山とは人の手の入っている、人にとって身近な自然のことです。膨大な年月の中で、人も自然の一部としてかかわりながら作られた自然なのです。人を寄せつけない原生林は長い年月をかけて、極相に向かう生態系を育む訳ですが、里山の自然は人の手が入ることで、人にやさしい里山特有の多様な生態系を保ちます。里山を放置すれば災害の危険が増す場合がありますし、生態系が壊れ絶滅の危機に瀕する動植物がでてきます。それは農業に影響を及ぼしたり、害獣、害虫の発生を招く場合もあります。

真光寺の周りの里山は今は荒れてはいますが、落葉樹林を育て落ち葉で堆肥を作り、また伐採し炭を焼いたり薪にしたりして利用していた昔の姿を保っています。真光寺の周りではキンランやエビネなどの照葉樹林の貴重な野草が見られ、フクロウやオオタカ、サシバなどの猛禽類も生息しています。さらにサンショウウオ、タコノアシ、ホトケドジョウなどの貴重種も確認されました。山から田んぼ、そして川に続く生態系を復活させることを夢見ています。それは人が自然と共に共生していく環境を再生していく作業でもあります。

真光寺の里山再生活動

真光寺の裏山の雑木林を片づけたところから、始まります。裏山の竹を片づけると稜線の美しい雑木林が出現しました。そこには貴重な草花が再生してきています。これに関わり始めた、千葉大学や武蔵工業大学の学生さん達と、オオタカやタコノアシをはじめとする貴重な動植物が生息している、真光寺の奥の谷の、かつては棚田が広がっていた場所を再生してみようではないかという機運が盛り上がりました。そこで昨年より荒れた田を借りて、田んぼ作りを始めています。今後は地域の人々とも手をたづさえ、地域協定を結び、里山保全地区にして、貴重な自然を守れないかと考えています。大勢の方々の力を集め、木漏れ日輝く雑木林に飛ぶ鷹の姿や、縦横の谷筋に田んぼの水が光る姿を夢見ています。

紅葉が美しい、秋の谷戸の風景

稲刈りの風景

夏の田んぼ

春の自然観察会／みんなで野鳥の観察をしています。

近くの農家の人と、武蔵工大の学生たち。脱穀作業を教わっています。

お寺の近くで、千葉県レッドデーターにある「タコノアシ」を発見。

植林活動も行っています。

2003年秋・竹林整備で出た竹材を使って、炭焼きに挑戦しました。

竹林整備の合間にひと休み。武蔵工大の学生達が手伝ってくれました。

斜面には桜を植えました。花の季節が待ち遠しいです。

法話

心をこそ大切に

真光寺住職　岡本　和幸

数年前のテレビの宣伝に桜を切ってもみじを植えた、というキャッチで京都の寺が紹介されていましたが、もみじが色ずく姿にはなんともいえない郷愁をいだくものです。真光寺にも庭に二本、裏山に三本のもみじがあります。特に山のもみじは巨木で、毎年美しい紅葉が見られます。

昨年紅葉が美しい頃、日光に行ってきました。東照宮、二荒神社、日光山輪王寺で知られる日光は、世界遺産にも登録されている、大自然と、人工造形美の絶妙にマッチした素晴らしいところです。また古代の山岳信仰や、日本でもっとも神仏習合の寺院形態が残っているという点でも、とても面白い所でもあります。東照宮で知られる日光は古代からの聖域で、男体山、女峰山、太郎山の三山の信仰があったようです。男体山は御神体であり、神様としては大己貴命（おおなむちのみこと）であり、仏教の仏としては千手観音であり、千手観音が姿を変えて日本の神として現れたとする本地垂迹説でいうところの男体権現という名前でもあります。また女峰山も同じように田心姫命（たごりひめのみこと）であり、阿弥陀如来であり、女体権現でもあります。また太郎山も味耜高根命（あじすきたかひこねのみこと）であり、馬頭観音であり、太郎権現でもあるわけです。古代においては男体山が父、女峰山が母、太郎山が子供という家族神ということで信仰されたともいいます。またこの山から生まれた命が子宮である中禅寺湖に落ち、命のしずくが華厳の滝を流れて、下界へと降りていくといった、インドの輪廻転生信仰つまり梵天の住まいであるヒマラヤで生まれた命がガンジスを下って下界に下りてきたという考えと、似たような信仰があったとも聞きます。輪王寺の本尊が女体山をあらわす阿弥陀仏、つまり母親であり、脇侍に父親の千手観音と子供の馬頭観音を従えているのも、もしかしたら女性を中心としていた古代社会のなごりかもしれません。

さて仏教と日光の関係ですが、東照大権現という名前は時の朝廷より賜ったということになっていますが、権現の権は仮のものという意味で、権現は仏や菩薩などが衆生救済のために姿を変えてこの世に現すことを意味するのです。つまり徳川家康は神になったというようりも、仏になったというほうが正しいともいえます。ちなみに本地垂迹説とは日本の古来からの神々は、実は仏や菩薩が人々を救うために権りに現れたものであるという思想で、仏教が日本に根付くための思想的な根拠になった考え方です。明治の神仏分離令までは各地で神仏習合の信仰が見られたのです。日光はさすがに徳川家の根本的な菩提所であり、神仏分離令も、廃仏毀釈も徹底されず、わりに昔のままに残っているようです。たとえば東照宮下には鳴龍で有名な薬師堂がありますし、境内には経蔵も残っています。日本の通常の大寺院には必ず鎮守堂または護法神をまつるお堂があるのですが、日光も全体の伽藍配置を考えると、輪王寺の（元来の鎮守堂は二荒神社だったと思いますが）鎮守堂を祀る位置には東照宮があり、東照宮は輪王寺鎮守としての役割をかねていることがわかります。もっとも家康は天海僧正を信仰し、東叡山寛永寺を開き、天台宗を庇護したわけですから、輪王寺の護持神となっても当然といえば当然です。

こうした歴史を踏まえながら、伽藍配置や、建築、造営にかけた昔の人々の心に思いをはせながら、散策してみると、その叡智とともに当時の人の願い、思いなども感じることができて、とても面白いものです。そんなことを考えながら東照宮拝殿までいきますと、たまたま郷土史研究家グループのような方々に、神官さんがお話をしておられるところに出くわしました。ちゃっかりまざって東照宮の説明を聞くことができました。

東照宮拝殿には下陣と、内陣があり、下陣には大大名までが入ることができて、正面右には将軍の間があって将軍しか入れなかったそうです、その下陣の左右の襖に、二体の霊獣が書いてあります。右が麒麟（きりん）、左が白沢（はくたく）という霊獣です。白沢という霊獣は全身真っ白で、体は獅子のようでもあり、顔は人間の顔を毛むくじゃらにしたような感じです。よく人の言葉を話し、徳のある王様が現れた平和な世の中に出現する霊獣です。麒麟はビールでおなじみですが、中国では聖人の出る前に現れるとされ、形は鹿に似て大きく、尾は牛で、ひずめは馬に似て、背毛は五彩で毛は黄色、頭上に肉に包まれた角があるといった、風貌です。この霊獣は歩くときも生草を踏まず、生き物は一切傷つけることがなく、草も、肉もすべての命あるものは食さず、ただ聖なる水のみ飲んで生きているとされているのです。ビール会社にすれば聖なる水こそビールとなるのでしょうが、それよりも麒麟は生きとし生ける命を害さないことの象徴、つまり平和の象徴としての霊獣なのです。

内陣正面の軒下には大きな獏の彫刻がずらりと並んでいます。想像上の獏は形は熊に似、鼻は象で、目は犀、尾は牛で、足は虎に似ていて、彩色された獏の頭が、並んでいるのを見ると、異様ですらあります。獏は夢を食べることで有名ですが、夢を食べるといっても悪夢を食べるのです。獏は邪気をはらう霊獣といわれていますが、さらに金属を食べるそうです。戦争が続くと金属がみんな刀などの武器になってしまうので、飢えに苦しむともいいます。

この三体の霊獣はもちろん、家康が祀られた廟の守護するとか、その徳を表すという意味から、獏は家康が聖なる存在であることを、麒麟はまれに見る傑出した人物であることを、白沢は徳のある人であったということを表しているのでしょう。神官さんはそれ以上に平和をもたらし

た家康に対する当時の人々の評価と感謝の表れが、平和な世の中にしか存在できない霊獣によって象徴されているのではないかといわれます。拝殿に伊達政宗などの大大名がやってきて座ると、右からは命を大切にしているかという目で麒麟にみられ、左からは徳のある政治をしているかと白沢がにらみ、さらに東照大権現を拝すると、上から獏が戦争をしたのでは生きられないぞと凄むのです。長い戦国時代、殺戮の狂気の中で逃げ惑った人々が、ようやく平和を得た喜び、それが東照宮のいたるところに表されているのだと。たとえば左甚五郎作の眠り猫はなぜ眠った姿だったのか、そして眠り猫の後ろで本来食べられてしまう雀が遊んでいるところにこそ、この彫刻の意味がある。薬師堂を祀っているのは東方薬師如来といって、東に住む仏でもあり、東から江戸を守護するという意味から当然ではありますが、家康という人が、戦国時代の殺伐とした人の心を治した、薬師如来のような人だという評価を得ていたとすれば、東の仏以上に、薬師如来を祀る意味が見えてきます。また豪華絢爛な陽明門の周りを彩るのは、ごく普通な人々の暮らしの姿です。おばあさんとおじいさんが普通に野良仕事をして、子供たちがその周りで遊んでいる姿が、彫刻、彩色されて、並んでいます。なぜそこにこんな普通の庶民の生活が描かれたのか、考えてみればそんな普通な生活ができるようになったのも家康のお陰だったのです。

すばらしい彫刻も、彩色も、当時の職人たちが丹精を込めたものですが、時の権力者である、徳川幕府に刀で脅されて作ったのではなく、本当にこの平和をもたらした家康を敬い、感謝しながら仕事をしたのであれば、それはすばらしいものが出来上がるはずです。

神官は続けて、家康が鎖国をしたのは武器を作らないということであった。それは武器を突き合せなければお付き合いのできない国とは、付き合わないという意味で、確かに江戸時代は鎖国をして、武器を作らないから、技術の発展は非常に遅れたけれど、少なくとも三百年間戦争はなく、また元禄文化に象徴される、庶民の文化が花開いた。平和国家を作ったのは家康の願いではなかったのかといわれ、単に豪華絢爛だ、当時はいったいいくら使ったんだろう、今ならいくらかかるだろう、そんな目で見るだけではなくて、平和をもたらした家康に対する当時の人々の心という観点から、もう一度境内をよくよく見てくださいという締めくくりでお話を終わられました。

日光東照宮の造営は二代将軍秀忠の時にあらかた終わっていたものを、三代将軍家光の時にさらに大規模に造営されたといわれています。いわば人々が平和な世の中を信じ始めた時に造られたものです。私たちが考える以上に、平和の喜びをかみしめながら造営されていたのかもしれません。

人はどうしても見た目の絢爛さに心を奪われます。人は物質的な価値観に偏って生きています。寺院を訪れるにしても、過去の建築を見るとか、芸術としての建物の彫刻や装飾を見るために行っているだけです。しかしそこには過去の人々の信仰や願い、心がこもっているのです。本当に知らなければいけないことは知識でもなく、表面的な芸術でもなく、文化でもない、人の心ではないでしょうか。日光という聖域全体から当時のさまざまな人々の心を感じることこそが大切なのだと、神官の話を聞いて思いました。

豪華絢爛な彫刻ばかりに気を取られて、本当に大切なことに目を向けない。これは私たちの日常にもたくさんあることです。そのために苦しむこともたくさんあるように思います。道元禅師と懐奘禅師の会話を記した『正法眼蔵随聞記』の中に、真実内徳無くして人に貴びらるべからずとして

「人に貴びられじと思わん事、安きことなり。中々身をすて世をそむく由を以ってなすは、下相計の仮令なり。」とされています。

世捨て人のふりをしたり、執着を捨てるといって、雨の中をあるいたり、ボロをまとったりすれば人は貴人だとあがめてくれるけれど、外づらばかりをつくろっても中身がなければまったく意味はないのだといわれます。私たちはどうしても物質的な価値観に重きをおきます。大きな家、豪華な装飾、贅沢な暮らし、そして自分を取り繕いながら世間の価値観に合わせて生きています。その過程ではさまざまな悩みを抱え、世間の価値観にあわせられないと生きていけないような気持ちになることさえあります。例をあげれば受験戦争や、昇進競争などの渦中ではそれが達成されないと生きていけないような気持ちがしてきます。それが自分が生きていくことと、本心から満足を得ることにはならないことはさまざまな事例が示していても、それに乗り遅れないわけにはいかない気がします。そんな外相との間で仮の自分を作っていくより、本当に大切なのは自分の心が豊かで、少しでも満足し、また将来に夢を持って生きていくことができるということではないでしょうか。

物質的な価値観からいうと、家康は鎖国をして、日本が近代社会から取り残される原因となったと、評価されます。ずるい狸おやじといった表現で表されることもあります。しかし当時の人々には平和をもたらしたまさに神様に見えたのかもしれません。そうした過去の人々の心こそ私たちは学び、大切にし、また自らの人生に生かしていかなければならないのではないでしょうか。

合　掌